

鳥取大学	正員	井上正一
鳥取大学	正員	西林新蔵
鳥取大学	正員	木山英郎

### 1 まえがき

三軸試験によるモルタルの配合条件、滑板粒径・粒度および混和剤の影響等に関しては一昨年・昨年と本大会で報告した。本報ではコンクリートの配合条件とレオロジー特性について報告する。

### 2 実験概要

使用材料は普通ポルトランドセメント、砕石（比重2.67、吸水率0.9%，FM=7.13、最大寸法20 mm）および天然砂と碎砂の混合砂（比重2.56、吸水率1.0%，FM=2.73）である。

配合設計の条件には、単位セメント量C、単位水量W、細骨材率S/aの3要因を選び、表-1に示すように3水準のCそれぞれ水に対してスランプが7.5 cmになるように基準配合を決定した。この基準配合から単位水量を7~10 kg/m<sup>3</sup>増減したもの6水準、およびS/aを2%おきに増減したもの5水準の配合を選定した。

三軸試験は $10 \times 20$  cmの円柱形供試体を用い、測圧一定（0.2~0.6 kg/cm<sup>2</sup>で3水準以上）、非排水条件のもとで、軸方向変位速度を一定（1 mm/min）に制御して行った。試験結果はモール・クーロン仮説に従って、全応力表示による内部摩擦角 $\phi_0$ と粘着力 $c_0$ を求めて考察した。

### 3 実験結果

S/aを一定にして、Wを変化させたときの中、 $\phi_0$ を図-1、-2に示す。このときの中～W関係はスランプ7.5 cmの基準配合をほぼ頂点とする下に凸の曲線となる。一方 $\phi_0$ ～W関係は基準配合を頂点とする上に凸の曲線となる。さらに単位セメント量が少なくなるにつれ、中、 $\phi_0$ とともに増加する傾向が認められる。

Wを一定にして、S/aを変化させたときの中、 $\phi_0$ は図-3、-4に示す。S/aの増加に伴い中はゆるやかに減少する傾向を示す。また単位セメント量が少くなるにつれ、粗骨材の影響が大きくなり、中の値は大きくなる。一方、S/aの増加とともに $\phi_0$ はほぼ直線的に増加する。また、単位セメント量の増加は滑板料の減少と相まって $\phi_0$ を減少させる傾向がある。

表-1 配合設計

s/a:一定 w:一定

C kg/m <sup>3</sup>	W kg/m <sup>3</sup>	S/a %	C kg/m <sup>3</sup>	W kg/m <sup>3</sup>	S/a %
300	168	46	300	182	42
	175			182	
	189			196	
400	168	44	400	182	40
	175			182	
	189			196	
500	168	42	500	191	38
	175			191	
	189			198	
	205			205	
	215			215	

